

日蓮大聖人御書全集

さじきのにようぼうごへんじ

栈敷女房御返事

むりようむへん くどく こと

（無量無辺の功德の事）

新版
1704
〜
1705

さじきのようぼうごへんじ　むりようむへん　くどく　こと
棧敷女房御返事（無量無辺の功德の事）

けんじがんねん　がつ　にち　さい　さじきのようぼう
建治元年（'75）5月25日　54歳　棧敷女房

によにん　みず

女人は水のごとし、うつわ物にしたがう。女人は矢のご

器　もの

によにん　や

ゆみ　番

によにん　舟

楫　任

とし、弓につがわさる。女人はふねのごとし、かじのまかす

によにん

夫　盗　びと

によにん

るによるべし。しかるに、女人は、おとこぬす人なれば女人

びと

おう

によにん　后

ぬす人となる。おとこ王なれば女人きさきとなる。おとこ

ぜんにん

によにんほとけ

こんじよう

ごしよう

善人なれば女人仏になる。今生のみならず、後生もおと

ひようえ　左　衛　門　殿

ほけきよう

こによるなり。しかるに、兵衛のさえもんどのは法華経の

ぎようじや

男　妻

行者なり。たといいかなることありとも、おとこのめなれ

ほけきよう によにん

ほとけ 知

そうろう

ば、法華經の女人とこそ仏はしろしめされて 候らん、

われ 心

発

ほけきよう

おん

おん

帷

また我ところをおこして、法華經の御ために御かたびら

送 給 そうろう

おくりたびて 候。

ほけきよう

ぎようじゃ

ににん

しょうにん

かわ

剥

もんじ

法華經の行者に二人あり。聖人は皮をはいで文字を

写 ぼんぷ

着

そうろう

帷

ほけきよう

うつす。凡夫はただひとつきて 候かたびらなどを法華經

ぎようじゃ

くよう

かわ

剥

ほとけ

納

たも

の行者に供養すれば、皮をはぐうちに仏おさめさせ給う

ひと

帷

ほけきよう

ろくまんくせんさんびやくはちじゅうし

なり。この人のかたびらは、法華經の六万九千三百八十四の

もんじ ほとけ

進

たま

ろくまんくせんさんびやく

文字の仏にまいらせさせ給いぬれば、六万九千三百

はちじゅうし

ろくまんくせんさんびやくはちじゅうし

ほとけ

八十四のかたびらなり。また六万九千三百八十四の仏、

いちいち　ろくまんくせんさんびやくはちじゅうし　もんじ

一々、六万九千三百八十四の文字なれば、このかたびらも

帷

またかくのごとし。

春　の　せんり　草　満　そうら

たとえば、はるの野の千里ばかりにくさのみちて候わん

少　まめ　ひ　草　放

に、すこしきの豆ばかりの火をくさひとつにはなちたれば、

いちじ　むりようむへん　ひ

一時に無量無辺の火となる。このかたびらも、またかくの

ひと　帷　ほけきよう　いつさい　もんじ

ごとし。一つのかたびらなれども、法華經の一切の文字の

ほとけ　奉

仏にたてまつるべし。

くどく　ふぼ　そふぼ　ないしむへん　しゅじよう　及

この功德は、父母・祖父母、乃至無辺の衆生にもおよぼ

わ　愛　夫　子　もう

してん。まして、我がいとおしとおもうおとこ・こは申す

およ

思

に及ばずと、おぼしめすべし。

きようきようきんげん
恐々謹言。

ごがつにじゅうごにち

五月二十五日

にちれん

日蓮

かおう

花押

棧敷 にようぼうごへんじ

さじき女房御返事